

提 言

大学体育の十字路

福岡女子大学 佐久本 稔

1. はじめに

私はどこから来て、どこへ行くのか。そしてなぜここにいるのか？

—「僕たちの冒険」リチャード・バック著、
帯に付されたキャッチコピーより—

今、日本の大学は国際化、情報化の大波に洗われている。

全世界を巻き込みながら、容赦なく進行するグローバル化のスピード。途方にくれながら、内へ内へと自閉していかざるを得ない閉塞感。目まぐるしい時代の変転の波間に、“根なし草”のように漂いながら、なおかつ生きる根拠を問わなければならない不安感。そうした寒々とした心象風景。正直いってこれが多くの人の心境であろう。

●われわれが避けて通れぬ課題は山積しています。

2. 悲観主義の蔓延

セリグマン氏は、現代に生きる青年たちに悲観主義が浸透している原因を三つ挙げている。

①肥大化した個人主義

自分が成功するか、失敗するかのみが人生最大の関心事である限り、憂うつ症も悲観主義も個人の夢が断たれた時に生ずる心の症状であり、また欲求不満によって生れた症状でもある。

②縮小した共同体

かつては、人々が精神的拠所とする確かな集団構造や大きな実体が存在した。しかし今やそれらの機構は侵食が進み、心を休めてくれるはずのソファアがすり切れてしまっている。

③どう感じるかを重んじる安易な社会

どう生きるかよりも、単に子どもの気分をよくさせたり、快樂のみを与えようとする教育がかえって弱い子どもたちをつくってしまう。簡単に敗北を宣言し、墮落し落ち込んでしまうのである。

●わたしたちの中にも悲観主義がしのび込んでいませんか。

3. 悲観主義への効果的な対応

①意味あるメッセージ

その中に意味あるメッセージが込められていると受けとることである。悲しいと感じるのは何かが失われようとしているからである。不安を感じるのは危険が近いという警告である。こうした不快なメッセージは自分の周囲に何かおかしいことが起きている。何か行動を起してそれに対処せよという警鐘である。

②持続的な対応

1つの課題に向って努力を重ね、失敗し、また挑戦するという持続の定式、失敗に耐え学ぶということである。それを通して、自分の失敗が乗り越えられるという経験的な自信を培っていくことができる。

③能力の限界に挑戦

人がどのような状態で一番幸福と感ずることができるかについて考えてみると、それは自分の能力の限界に挑んだ時であるという。

●現場で苦闘するわれわれの声が、どれだけ教育に反映されていますか。もっと楽観主義でまいりましょう。

4. 独立行政法人化と大学体育

われわれの同志東大の小林寛道氏は、表記の特別講演の中で、「生臭い話だけれど、あと10年でいまの大学行政法人化の理論の中で、体育がリストラされる側になるのか、それとも何がしかの知恵を出して生き延びるか、という分岐点に立つであろう。その時は、全国大学体育連合としても、何か新しい何かを。一つのヒントとしては、全国一律の教育学部のカリキュラムから、そうではない特別な新しい協力し合った形を何かをつくっていくとかそういう道でもつくっておかないと。ただ救いなのは、国民が健康とか、体力、あるいはスポーツを非常に求めている、社会からの要請をすごく受けていることです。ただ体育の人たちは、社会的期待に対して十分応えていないという部分もあるのではないか。

- 日本体育学会新理事長(次期専務理事)の小林先生、衆知を集め智慧を絞って、「あと10年あるなら、少くとも1年で基礎を打ち立て、5年で足場を築き、10年で輝やかなしい成果を創出する」との基本理念で、何かをスタートさせる。というのはいかがでしょうか。

5. おわりに

最近の傾向として、履習科目の中で専門分野に比べて、基礎的な一般教養のウエートの低下が進んでいる状況がみられる。一般教育の見直しはもとより、社会のめまぐるしい変化に伴い、学問分野の専門化や細分

化がさらに進んでいくことを考え合わせると、学生が受ける教育内容はますます限定的なものになる恐れがある。

その中で、1つには「全体性」と「専門性」を兼ね備えた教育の見直しを強力に押し進め、教養教育としての積極的な存在価値を有する大学体育を再構築しなければならないのである。

- 時代の変化に気づけない人はとり残されていくであろう。しかし、変化にばかり気をとられ、大事な魂を失っては足をすくわれてしまうであります。

わたしのそしてあなたの専門性と全体性を学生のために、地域社会のためにもっと生かせませんか。

ティーチング・ポートフォリオ

— 日本的大学風土への可能性 —

京都大学教育学研究科 杉本 均

近年北米の大学などの高等教育機関においてティーチング・ポートフォリオ (teaching=portfolio) と呼ばれる概念もしくは活動が脚光を浴びるようになってきている。これは大学教員の研究活動の記録・業績である論文や実績発表に対して、教育活動の記録、教育業績の証拠となる書類を残して何らかの評価の対象としようという動きをさしている。ポートフォリオとは本来書類を入れて持ち運ぶためのかばんのことであり、芸術家や写真家、建築家などが自分の作品を入れて顧客に売り込みをはかるときに持ち歩く、大きな作品サンプル・ファイルがその類推の起源とされている。つまり大学教員の教育活動作品集のファイルにあたるものがティーチング・ポートフォリオであると言える。

近年大学教員の教育活動、大学教員の教育者としての側面に関する関心は世界的に高まっており、これまで研究業績に向けられてきた大きな圧力の一部を教員の教育活動に向け、相応の評価を与えようという動きは欧米で、そして日本でも一定の機運に達しつつあるといえる。問題はそうした教育評価の機運に対して、それに対応しよう、準備しようという教員側の心構えがほとんどなく、と言うよりは、準備する方法をほとんど知らず、教育活動が研究論文のように証拠や評価の対象になるという発想さえないというのが実情である。アメリカやカナダなどの大学・カレッジでは、すでに1980年代後半以来、高騰する授業料に対応して大学のなかで行われている授業の質に関心が持たれはじめ、現実の要請として大学教員に教育の技量を示すことが求められるようになり、そのための技術および指針ともいえる原則について、さまざまな実践や試行が行われてきた。

より具体的には、教員の採用、昇進、テニユア (終身在職権) の付与、そして優秀教育賞などの授与の選定資料として、研究業績だけではなく、場合によっては研究業績以上の重要な資料の一部として、ティーチング・ポートフォリオというファイルを作成することが求められるようになってきている。その場合ティーチング・ポートフォリオとは、ある教員の教育活動

(通常は担当のコース)の実態と成果をできるだけ多面的に歪みなく伝える、最小限の資料 (通常は文書・写真・実物サンプル)の集合ファイルということになる。

それでは大学教員の教育作品サンプルとはいったい何なのだろうか。授業をビデオに取れば簡単にサンプルはできるが、今のところ編集にも再生にも時間がかかり、ファイルという一覧性や携帯性においても問題があるので、一般的には文書や図表としてファイルに綴じ込めるものが主流となっているが、体育系や音楽系などの特定の分野では、ビデオ資料の有効性は否定できないであろう。ポイントは授業の受講による学生の変化の実証であり、そのために教員の行った努力の提示である。例えばあるコースの授業教案やシラバス・配布教材はもちろん、学生のレポート、授業へのコメント、アンケートへの反応なども当然含まれる。同僚が自分の授業を観察評価してくれれば (いわゆるピア・レビュー)、その講評は貴重な資料であり、報道メディアに取材された記事や受講生のその後の進路や活躍の資料などもあればさらに望ましい。

ティーチング・ポートフォリオというファイルは一つ一つの文書や記事の集まりであるエントリー (entries)からなっている。エントリーは通常、内容を簡潔に示す表題 (キャプション)、そして教授活動の実際の証拠となるサンプル (worksample)、そしてそれをどう解釈し、なぜここに選び、どんな意味をもつ



のかについて教員自身がコメントした検討・解釈（リフレクション：＝reflection）によって構成されている。統計データなどを加工してより見やすくするなどの場合を除き、証拠であるワークサンプルには、ポートフォリオ作成の時点では一切手を加えることはできないとされている。

さらに教授活動の証拠となるワークサンプルには、その生成過程から分けて大きく3つの種類がある。主体となるのはアーティファクト（artifacts）と呼ばれる、学生の成績票や添削前の学生レポート、教師の準備したシラバスや読書リスト、資料のプリントなどの現物、大学から渡された学生評価の結果や自分の授業が紹介された新聞記事など。第2には、自分の教育活動に対して与えられた表彰状や他の機関などからの招聘状など、現物の代わりに複製を入れるリプロダクション（reproduction）、そして第3に学生レポートに自分が書き添えたコメント、学生や同僚教員に授業を参観してもらったときのコメントなどの事後コメント（reflective commentary）などがある。そしてその授業の様々な側面ごとにエントリーが準備されるのが望ましいとされている。

大学の授業はきわめて専門性が高く、また良い授業の定義も様々である。従って特定の形態や資料の提示方法をフォーマットととしてここで示すことは、かえってポートフォリオの可能性を限定させることにもなりかねない。体育系の教育には体育系にふさわしい形態や内容のポートフォリオがあるはずで、それはむしろ実践のなかから経験的に生み出されると考えたほうがいいであろう。

ひとつの問題は複数の教員からポートフォリオが提出された場合、それにどのように優劣をつけるのかということであり、この点はアメリカでも研究途上である。これまでの事例から見ると、ポートフォリオをいくつかの要素に分解して、それぞれについて4～6段階の評価を与え、その結果に適当なウェイトを加えて合計するという方法が取られる場合が多い。この方法は無難ではあるが、特定の技能、例えば話術とかブ

レゼンテーションとかにとび抜けて優れた教員がいても、それぞれのカテゴリーにおいてわずが数ポイントの差しかつかないので、いわゆる職人芸的・芸術的授業として名高い名物教員よりも、そこそこに優れた点の多い教員のほうがいい評価を得る可能性もある。また大学の授業はきわめて専門性が高いので、その授業の良さを正確に評価するには、その分野の限られた専門家にしかできないのではないかという議論もある。

ティーチング・ポートフォリオが日本の大学などに根付くにはまだしばらくの時間が必要であろう。特に日本的な大学風土においては、教員の負担増への抵抗や、あるいは大学当局による管理強化への恐れなど、教育活動を重視しようという動きに対して大学内からの少なからざる抵抗や多くの障壁が予想されている。このような困難な状況のなかで、大学当局がかなりの額の資金を工面して、「優秀教育賞」「学長奨励賞」などのすぐれた教育活動を讃える教育賞を創設することは、教員に教育への関心を呼び起こす、最も抵抗の少ない方法のひとつであると考えられる。やがて賞金の額や威信が高まるにつれて、それでは「すぐれた教育活動」とは何を意味するのか、すなわち受賞の根拠をいかに明確に客観的に示すか、という問題が起これ、ここでもティーチング・ポートフォリオが脚光を浴びることになる。すなわちティーチング・ポートフォリオは日本のような大学風土においては、人事にかかわる判定資料として利用することにはかなりの抵抗が予想され、細心の注意が必要であるが、逆に教育賞などの導入の根拠としての利用などに用いれば、FDへの抵抗の大きい日本の大学風土において、最初の突破口となる可能性も秘めているといえる。

これまでの研究に過度の力点を置いた日本の大学教員の評価の流れを変える最初の契機は、教員自身の教育活動への目覚めであり、それを記録に残そうという常日頃のちょっとした気配りであろう。動きを変えるのには、何よりも実践が大事であり、蓄積が必要である。これらの蓄積は必要とされてから、かき集めたのでは手遅れであることが多いのである。

「マンガ的ものの見方、考え方」と「合気道、和の心」の傍聴記

佐賀大学文化教育学部 金崎良三

今回の特別講演は、郷土の名士にお願いしようということになり、検討した結果、白羽の矢が針すなお先生に当てられた。現在、仕事の関係で東京と佐賀の二重生活をされており、忙しい合間をぬって講演をしていただいた。以下は、その概要と司会を担当した私の感想である。

まず、針先生のプロフィールを紹介しよう。本名は、高閑者順と書いて「たかがわすなお」と読む。昭和8年3月に佐賀市に、高伝寺（鍋島藩の菩提寺）前住職の五男として生まれ、昭和26年3月佐賀県立佐賀高等学校を卒業し、同28年漫画家を志して上京。独立漫画派を経て漫画集団に所属。同48年似顔漫画集「そっくり」で、日本漫画協会優秀賞を受賞。新聞、雑誌、TV等に政治、スポーツ、芸能一般にわたる似顔絵漫画を寄稿。TVでは、フジテレビの「歌謡ものまね王座決定戦」の審査員と出演者の似顔絵、NHKテレビの「クイズ日本人の質問」の出演者の似顔絵等でお馴染みである。新聞では、全国紙、地方紙の政治漫画を担当。平成10年7月に文芸春秋漫画賞、同11月には佐賀新聞文化賞を受賞されている。

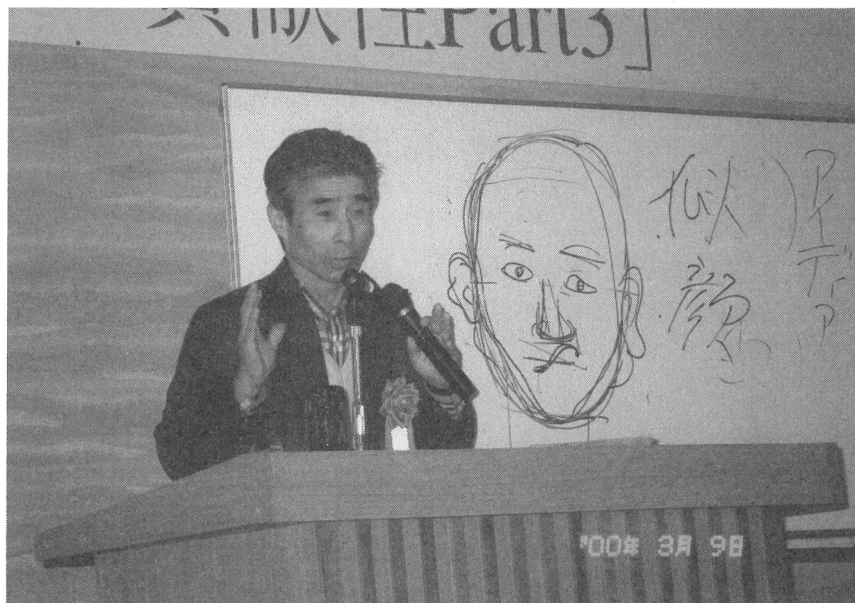
一方、合気道に関しては、40数年のキャリアを持ち、

現在七段師範の腕前である。平成2年、佐賀市本庄町に「体の杖と合気道、高伝館」を開設。独自の技「体の杖」を創始。本拠地東京では二つの道場を指導し、平成12年5月には福岡市にも道場開設を計画中である。

以上のことからわかるように、針先生には漫画家としての顔と合気道師範としての顔がある。漫画家としては有名であるが、合気道のキャリアについてはあまり知られていない。

講演の内容は、テーマにもあるように二つに分けられる。まず、漫画的ものの見方、考え方についての話の要旨は概ね以下のとおりである。

「私は、学校の成績は良い方とはいえませんでした。似顔絵を書くのがうまかったので、芸は身を助けるといいますように、いろいろと得をしてきました。漫画というのは、何となく書いていたのではいけません。その道のプロというものは、この点なら人に負けないぞというものを持っていないとやっていけません。私の場合は、たまたま似顔絵だったのですが、ボクシングでいえば一発で相手をKOするような技を身につけることです。漫画は、ただの絵ではなく、そこ



講演中の針すなお（漫画家）先生

にアイデアが加わって初めて漫画になるわけです。普通のままではなく、発想の転換といいますか、一つひねった見方をすることです。例えば、ここにカラオケで歌っている人がいます(板書)。このカラオケ店では、何曲歌っても良いとしましょう。しかし、最近ではマイクを持ったら離さない人がいます。他の人は、早く代わってほしいと思っています。これを、スケッチ風に書いていただけでは面白くありません。そこで、マイクの下に重い鉄アレイをぶら下げてみます。これですと、マイクが重すぎて何曲も歌えないということになります。こうしたアイデアが、漫画的なもの見方となるわけです。明日朝の新聞に出す原稿は、だいたい夕方6時ころから8時くらいまでに出さないといけないのですが、アイデアというものは、すぐに出てくることもあれば、時間をかけてもなかなか出てこないときもあります。そういうときは、実に苦しい思いをします。似顔絵は、書きやすい顔と書きにくい顔があります。どうやって似ている顔を描くか、まず相手をじっくり観察します。そして、その人の特徴をつかむわけです。相手に圧倒されたり、目がくらんだり、美人だなーと感心したりすると、こちらの負けになります。漫画は、物真似はまったくダメです。そこに個性を表すことや共感を得ることが大切です」。

漫画的なもの見方について、ひととおりの話が済んだ後、80枚ほど芸能人の似顔絵をスライドで見ながら、一人ひとりの特徴やその描き方について説明があった。さすがプロ、一目見て誰とわかるものばかりであった。

続いて、後半は合気道の話に移った。

「私は、何か武道をやりたいと思っていましたが、24歳のときある道場で合気道を見学しました。そこで、弟子がかかってきても微動だにしない達人の姿や動作を見てビックリしたわけです。それから、合気道の世界に入って行きました。スポーツは、ルールという約束事があり、その上に立って勝敗を競うものですが、合気道は相手をいかに負かすとか、勝った負けたの世界ではありません。人間は宇宙から見ると、小さな

存在です。その宇宙の気持ちで、相手を愛することが大切なんです。つまり、力のぶつかり合いではなく、相手の力を利用して、円を描くがごとく相手を吸い込ませるように導いて技をかけます。技が決まったときに、ガッツポーズなんかは取りません。ところで、合気道は素手で行いますが、私は約10年前から、これに檜の木で出来ている杖を取り入れて「体の杖」(たいのじょう)という独自の杖法を始めました。これは、合気体術の動きで、打・突・投げ・押さえなど多様な技で剣と対応する杖法です。現在、約70種類の技を開発しました。今のところ、佐賀と東京の道場でやっていますが、ゆくゆくは各地に広めていきたいと思っています」。

この後、佐賀の道場で撮ったVTRにより、実際の合気道と「体の杖」が紹介された。

今回の講演の内容は、漫画と合気道という非常にユニークな組合せであった。個性や魅力、アイデア、共感が必要とされる漫画の世界でプロとして生きることの厳しさの一端を伺い知ることができた。特に、アイデア創出の重要性を説かれたわけであるが、こうした職業上のクリエイティブな生き方が、一方で合気道に杖を取り入れた「体の杖」という独自の杖法を開発することにつながったのではないと思う。似顔絵を書く上で必要とされる資質、生き方は、大学で体育・スポーツの研究・教育を職業としているわれわれにとっても、また必要な姿勢であるといつてよい。物真似でない、未だ誰も手を付けていない独創的な研究、アイデアが面白い研究は、周りから注目され、共感を得ることになる。日頃行う授業に関しても、またしかりである。

大学体育の危機が叫ばれて久しい。いや、既に危機に貧している昨今である。旧態依然たる制度にあぐらをかいていたのでは、大学体育の未来はない。われわれは、大学体育のプロフェッショナルとして、いろいろなアイデアを持ち寄って未来を切り開いていかなければならないということを、改めて認識させられた講演であった。

日本の大学体育における野外教育の現状

— 海洋型プログラムへの取り組みを中心に —

鹿屋体育大学 柳 敏 晴

1. はじめに

野外教育は、体験を通して学ぶという体験学習である。体験学習の特色は、①学習者中心の学習、②学び方を学ぶ学習で、体験学習から得るものとして、主体性、現実性、協働性、創造性、試行性がある。体験学習の段階は、①体験する（何かしてみる）、②指摘する（何が起こったか、プロセスを見る）、③分析する（どのように、なぜ起こったのか、プロセスを考える）、④仮説化する（学んだことは）、⑤試みる（プランをたて、実行する）という五段階があり、この体験学習の段階が体験を積む度に螺旋状に広がっていく。この体験をするためには、自然の真っ直中へ出ていかなければならない。昔から、野外活動実習という形で、キャンプ等が行われていたが、現在その形が変わりつつある。最も顕著なものとして、海洋型施設での野外教育実習がある。ここでは、5大学の実習を紹介する。

2. 各大学の例

1) 大阪体育大学の野外活動実習

野外活動実習授業の目的方針：野外活動実習は、学外、特に自然の中で行う教育活動の一つである。指導者養成を前提とし、安全でより大きな学習効果を上げるために理論的・実践的な指導法を教授する。また、活動を行うに当たって宿泊を伴う集団活動のあり方について考える。野外活動実習には、スキー、水泳、海洋スポーツキャンプの3実習があり、体育専門基礎科目として3実習の中から1実習を選択しなければならない。また、卒業所用単位として、2単位（1実習1単位）まで認められている。各実習共事前のガイダンス（2～3回程度）、健康チェック、費用納入等の手続きを適正に行った者のみが参加できる。

・海洋スポーツキャンプ実習のプログラム概略：

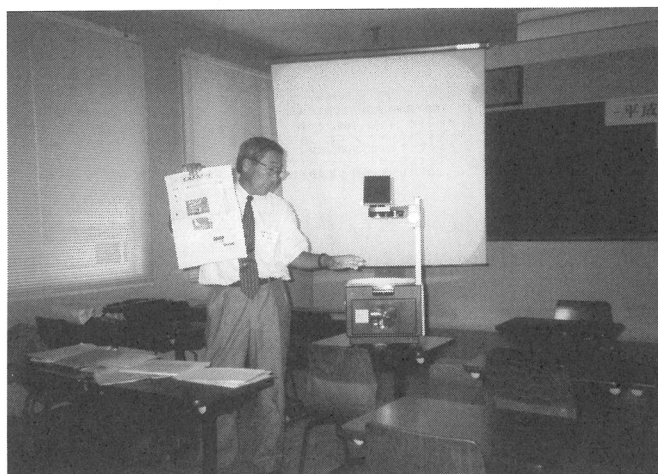
ヨット、ウインドサーフィン、カヌー、カヤック、シュノーケリング等の海洋スポーツプログラムとウォークラリー、キャンプファイヤー、野外炊飯等のキャンププログラム
カリキュラム改訂に伴い林間での教育キャンプ

実習から海洋スポーツキャンプ実習へシフトした。学校教育に即したキャンプから、生涯スポーツ・余暇スポーツに対応した基礎体験ができるキャンプに衣替えをした。

授業の効果として、海の自然や環境への問題意識、海や自然の厳しさの体験から自らの責任や安全への配慮、命の大切さ、ルールやマナーの見直し、野外での技術、共同作業や活動を通してグループ機能を高める体験、自分達で考えまとめるスタンス、等仲間づくりとしても個人の体験としても貴重であると述べている。

以前と異なる点として、実施プログラムの焦点を、余暇時代に需要が伸びると考えられる海洋スポーツにあてたこと、実習の生活条件が変わったこと、従来は1日3食全て薪石組竈を使用しての自炊とテント泊（日常生活環境より不便な状況での実習—不便で困難な状況の中での創意工夫、グループとしての協調や役割と責任の確認、文明生活への思索等のメリット）、生活環境をある程度快適に保ち、その分プログラムの充実を強調するタイプのキャンプが、現在の余暇社会・余暇スポーツを考える上で重要という判断がされている。

目的として、将来の体育・スポーツ指導者としての資質の向上、具体的には、自然の中でのキャンプ生活、キャンププログラムの体験、知識・技術の修得、セーリングを中心とした海洋スポーツの体験、知識・技術の修得がある。



2) 姫路獨協大学

スポーツ文化科目が「スポーツ（レクリエーションやアウトドアを含む広い意味でのスポーツ）についての科学と理論を実践的な活動を通して研究・教授することによって、これからのスポーツ文化の創造的な担い手を形成すること」を目的としている。

「自然活動実習」は、自然環境を対象とした生活及び能動的な身体活動を主要な内容に、ねらいは、自然の構成員である人間（私たち）が、あるがままの自然に対してどのように関わっていいのかを追求することにある。この追求の過程で自然・自己・他者の認識が一層広がり、また深まることを期待している。スポーツ文化的な実践を生涯にわたる豊かな生活の内容にするように以下のことに重点を置き実技と理論を展開し、スポーツの魅力と楽しさ、われわれを取り巻く自然環境との関わり方への考察を深めることを期待している。「自然活動実習」の構成は、夏季のプログラムとして山野実習と海洋実習、冬季のプログラムとして雪上実習（アルペンスキー）と雪上実習（ネイチャースキー）を設け、夏季と冬季のプログラムをそれぞれ一つずつ受講し四季折々の自然を感じる。

3) 徳島大学総合科学部人間社会学科

授業の目的と趣旨は、「生涯スポーツにおける野外活動としてマリンスポーツの理解と技能の向上を図る。また、それに関する指導法を取得させ、指導力の向上も図る。集中講義形式で、9月上旬に行う。海上ではライフジャケットを着用して活動するので、泳げなくても学習できる。

授業の内容と計画は、YMCA 阿南国際海洋センターに宿泊（2泊3日）して実習を行う。プログラム内容は、ディンギー（小型ヨット）、カヤック、インディアンカヌー、ボードセーリングとポディーボード、シュノーケリング、フィッシング、キャンプファイヤー、スタンプ、学校教育における特別活動（講義）である。

4) 国際武道大学体育学部体育学科レクリエーションⅣ夏期野外活動（カヌーキャンプ）

目的は、野外レクリエーションの種目であるカヌー及びヨットとキャンプの3種目を、講義や実践を通して基礎的な知識と技術を身につけ、合わせてキャンプインストラクターの資格を取得する。

対象は、体育学科3年生を中心にして、レクリエーションⅣを選択履修した者で、実習地は、YMCA 阿南国際海洋センター及び周辺の無人島である。

実習に対する諸注意：1. 体調をベストの状態にしておくこと 2. 生活・実習共に講師及び指導教員の

指示に従うこと 3. 実習に出る前は用具の点検を必ずすること 4. 実習前後の自由時間は、教員の指示なくして勝手に行動してはならない

5) 大阪国際女子大学人間科学部

平成10年度に開講した人間健康科学科開講科目「レジャースポーツ」の夏期集中講義をベースに、新たにスポーツ行動学科を対象にした課外講座「海洋スポーツ」を追加した合同研修、スクーバダイビングのCカード取得講座も加え、より幅の広いものとなり、今後も大いに発展しようとしている。

3. まとめ

野外教育は、21世紀を担う青少年を育てる重要な教科になると考えられる。21世紀に向けて、地域にある色々な資源を活用できる人材を養成する指導者養成システムの構築が必要である。環境と開発に関する世界委員会の持続可能な発展報告書の題は、「私達共有の未来：Our Common Future」で、環境ホルモン問題を指摘したコルボーンらの本は、「奪われし未来：Our Stolen Future」である。私達人間の行為が、人間自身の未来を奪いつつある。未来に希望を持って生きるためには、自分らしく生きる、共に生きることの意義、他者と共に生きることの楽しさを知らなければならぬ。そのためには、責任を分担し、自分の与えられた役割を果たす、共同生活の体験が不可欠である。感性が柔軟な若い時代に、野外におけるキャンプ活動をすることで、自然の息吹を感じ、大きさ、畏れを体験する。また、共に生活する喜びを感じることが出来るキャンプでは、大学や家庭では味わえない生活体験、学習経験の機会がある。中でも「なしつつ学ぶ（Learning by doing）」が大切な原則である。自然の理解についても、教科書で覚えた知識としてではなく、豊かな自然に触れ合う直接体験を通して深められ、後に行動態度として具現化されていくことが期待できる。このように考えると、大学体育で野外教育を取り上げる意義は大きいといえる。

引用・参考文献

1. シーア・コルボーン、ダイアン・ダマノスキー、ジョン・ピーターソン・マイヤーズ著：奪われし未来、翔泳社、1997.
2. 酒井哲雄、柳敏晴、松下雅雄、谷健二：東洋スポーツ指導者ハンドブック―施設の立案から運用、プログラムの指導まで―、鹿屋体育大学海洋スポーツセンター、1998.
3. 津村俊充、星野欣生：Creative Human Relations Vol. I、株式会社プレスタイム行動科学実践研究会、1996.

大学体育における野外教育の可能性を探る

九州大学 山本 教人

I. はじめに

'96年における国民の余暇活動の実態についてみると、不況に強いといわれてきたパチンコが人気を落とす一方で、園芸・庭いじり、ピクニック、ハイキング、野外散歩、登山、フィールドアスレチックが人気を集めているという。また、ヤングファミリーを中心に、これからやってみたいレジャーとしてオートキャンプが相変わらず高い支持を得ているという。さらには、今日売れているスポーツなどに目を向けてみても、野外活動に対する人々の関心が高まりを見せていることは明かである。

このように、今日多くの人々の関心を引きつけている野外活動が、教育として行われることには一体どのような意味があるのだろうか。本論では、大学体育における野外教育に何が期待されているのか、何ができるのか、といった意味での「可能性」について、換言すれば、大学体育における野外教育の意味について、社会科学的な観点から考察を加えてみたい。

II. 社会への適応、あるいは社会の延命手段としての野外教育

戦後の我が国の急速な経済成長は、我々がかつて経験したことのないほど豊かな生活を可能としたが、こうした経済的豊かさは、自然環境というもう一方の豊かさの犠牲のうえに成り立ったものであった。生物体としてのヒトの進化のスピードを遙かに凌駕する社会変化のスピードは、ストレスや生活習慣病をはじめとする様々な病理現象を、我々の心や身体に顕現させるに至っている。今後もいっそう変化のスピードを加速させるであろう社会で生きていかなければならない人々にとって、野外活動の経験は、つかの間であれ人間らしさを回復し、ストレスや種々の健康問題に適切に対処しながら既存の社会への適応を可能にしていくために、教育として保証されなければならない。

野外活動の教育的意義を、このような観点から論議する研究者や教育関係者は多いが、このような考え方は、学校教育に体育が取り入れられ、市民生活にスポーツが普及していく過程で、体育やスポーツの意義につ

いて語られてきた語り口そのものであるといえる。つまり、その発想の根底にあるのは、「人が社会に適応していく手段としての体育・スポーツ」、あるいは「近代日本の成立と、その延命手段としての体育・スポーツ」と表現し得るようなものである。このことは、例えば明治期には、近代戦を戦える身体づくりの必要性への自覚から、学校教育を通じて「ナンバ歩き」が「行進」へと変更されたということ、また、戦後の高度経済成長を経て豊かな時代をむかえると、今度は急激な社会変化が引き起こした健康問題に対処するために、「健康・体力づくり」のための体育・スポーツや「コミュニティ・スポーツ」が強調されてきたことなどを考えると理解しやすいだろう。

III. 欠落した視点

誤解のないよう予め断っておくが、「人間性の回復」、「健康問題の補償」、「社会への適応」などとして野外教育の意義を論じることは間違いである、ということがここでいいたいのではない。そうではなく、このような観点から野外教育の意義を論じることで、逆に論じられなくなってしまう側面について注意を喚起したいのだ。つまり、「社会への適応、あるいは社会の延命手段としての体育・スポーツ」という発想で野外教育の意義が論じられることで、我々が適応を求められている今日の社会とは一体どのような社会なのか、ということに思いが及ばなくなってしまうのではないかということである。

我々はいま、資本主義社会と呼ばれる社会システムの中で生活している。人間の欲望をつくり出し、消費させることで自らの延命を図るというこのよくできた社会システムは、人間の欲望とそれをかなえるための生産を際限なく肥大させた結果、過労死、ストレスとそれによる問題行動、環境破壊、貧富の格差など数々の深刻な問題を今日生起するに至っている。しかも、一見すると豊かな社会に暮らしている人々も、このような資本主義の矛盾に徐々に気づきはじめていて。であれば、人間性を喪失させたり、様々な健康問題を生起させているこのような社会のあり方に無批判なま

ま、それへの適応といった観点からのみ、野外活動の教育的意義を語っていて果たしていいのだろうか。既存の社会への適応ではなく、社会批判という観点から、野外活動の教育的意義を模索できないであろうか。このことについて考えをめぐらすことは、はおそらく「教養としての大学体育」に新たな可能性を開くはずである。

IV. 野外活動経験の批判的意味

以下のような著者自身の経験を、まず掲げておこう。

- ・久住山の山頂で、「よく頑張った、頑張った」といって抱き合っている初老の男性がいた。
- ・山登りをしていたとき、「谷に飛び降りてみたい」とふと思った。
- ・縄文杉と対面して、泣いてしまった男性のテレビレポーターがいた。

キャンプを経験することで不登校が改善されたり、就寝や起床が規則正しくなった、などという話はよく耳にするが、野外活動の経験は、一方では、責任、チームワーク、決断力、忍耐など、我々の社会で広く受け入れられている価値や規範を支持、強化するように作用する。しかしながらもう一方では、上の例にあるように、「白昼堂々と男と男が抱き合う」こと、「死への誘惑を感じる」こと、「男が涙を人前で晒す」ことなどの経験は、「何々すべきである、あるいは、すべきではない」といった、社会規範からの逸脱である。この意味で、野外活動の経験は極めて両義的な経験であるといえる。既存の価値や規範を支持、強化する野外活動の経験については、それが「社会への適応、ある

いは社会の延命手段」として作用するものとして既に検討済みである。問題は、これまで「ストレス解消」、「感動」といった陳腐でチープな語りしかされなかった上に掲げたような類の経験を、どのように評価すべきなのか、ということである。

「何々すべきである、すべきではない」という規範意識は、ほとんど無意識のレベルで我々を捉えて離さないようなものである。従って、男同士が公然と抱き合ったり、死んでもかまわないと思ったり、人前で泣いてしまうという経験は、ある種の罪悪感やとまどいを本来ならば伴う経験である。しかしながら、野外活動においては、人はこの種の「掟破り」を、後々、「どうしてあんなことができたのだろう」と、自ら不思議に思うことがあるほど何のとまどいもなく行ってしまう。こうした経験の意味を、「重要な社会的場面で行われたことではないから許されることなのだ」と安易に納得してしまわないで、真面目に考えてみよう。そうすると、「何々すべきである、すべきではない」という規範意識、現前している社会関係、人間関係の一切が、実は「可能なヴァージョンのひとつ」として、それ故場合によっては「変更可能なもの」として立ち現れてくるのではなかろうか。この意味で、野外活動の経験は、我々に自らが住まう社会のあり方、人間関係のあり様を反省的に捉え直す重要な契機を提供している、ということが可能なのではないだろうか。批判精神を鍛えるということが大学教育の一目的であるとするなら、これこそが大学体育における野外教育の新たな可能性といえるのではないかと考えるがいかがであろうか。

大学体育における野外教育の位置づけ

鹿屋体育大学 柳 敏 晴

1. 現代社会における野外教育

都市化が進む現代社会において、便利さが人間の基本的能力や社会生活の生き方を歪めたり、子供たちが自然の中で解放され、自然の中から人間の素朴な生き様の原点を探る機会が少なくなってきたと考えられる。これらを回復する手段の一つが野外教育やキャンプで、これらの経験には適時性があると考えられているが、大学時代でもまだ遅くはなく、自然との接触を徹底的にすれば、都市と自然との結びつきを思考できる豊かな人格形成へと結びつけられると考えられる。現代日本の大学生の一般的特徴は、現代っ子的特徴とほぼ同様で、一人っ子が多く、多人数と遊べない、集団遊びができない、外遊びができない、自然体験が少ない等が考えられる。

2. 野外教育・キャンプの流れ

「キャンプ」とは、野外生活として教育的配慮の下に設定されるプログラム・企画の総体を指している。キャンプは、アメリカ人がアメリカという国づくりの営みの中で、必然的に生みだしてきた卓越したプログラムと考えられる。都市生活からの脱出と自然への復帰を目指し、男性的な野外生活に重点を置いた「レクリエーションの時代 (1885~1920年)」といわれる時期、長いキャンプ生活に各方面からの批判が出てくる中で、心理学、精神衛生、社会学、教育学などを導入した「教育性強調の時代 (1920年代)」といわれる時期、恵まれた少数の人達だけのキャンプから、全ての人達のためのキャンプへ広がり、民主主義的生活訓練の場としてのキャンプが行われた「社会性強調の時代 (1930年代)」といわれる時期、キャンプが教育の手段・方法として認められ、教育活動に積極的に取り入れられた「野外レクリエーション強調の時代 (1940年代)」といわれる時期、公共高等教育機関が野外教育の重要性を認め、学校キャンプが普及し始めた「カリキュラム強調の時代 (1950年代)」といわれる時期、高度経済成長政策時代の自然破壊進展に対する問題提起から「自然保護強調の時代 (1960年代)」といわれる時期、自分たちを取り巻く環境問題に関心を持ち、理解を深

め、自らの問題として解決に向けて実行するという環境教育が始まり「環境教育強調の時代 (1970年代以降)」といわれた時期が続いた。今や21世紀に向けて、美しい地球を将来に残すための、持続可能な開発 (Sustainable Development) がキーワードとなる時代となり、大学体育でも野外教育を積極的に活用する必要が出てきていると考えられる。

3. アメリカ合衆国の教育界や大学における野外教育

1861年夏フレデリックW. ガン夫妻が学校の生徒のために教育的意図を持ったキャンプをミルフォードで行ったのが、教育キャンプの始まりと言える。このキャンプは、ヘンリーD. ソローの著書『ウォールデン森の生活』(1854)にも影響された「自然に帰れ運動」が背景にあったと考えられる。H. S. ディモックによるキャンプにおける最初の文献「キャンピングと性格 (Camping and Character)」(1929)が発刊され、今日の教育的キャンプの基礎ができた。「キャンプ基準 (Camp Standard)」が制定され、B. S. メイスンによるキャンプの意義を社会的に捉える「キャンピングと教育」(1930)、L. B. シャープによるキャンプ教育という言葉を広める「教育と夏季キャンプ」(1930)、等が発刊され、キャンプによる教育が進展した。ニューヨーク州立教員養成大学体育専攻に野外活動指導者養成コースが設置され、ワシントン州ハイライン公立学校区に小学5・6年生対象の夏季キャンプが開設 (1939年) される等、教育界でもキャンプの価値が認識され始めた。野外でのレクリエーション活動の諸技術の指導を強調した J. W. スミスを中心とするミシガンのプログラムと、野外科理等の開拓時代の生活技術の模擬体験を重視し、野外での生活技術の指導を中心とする L. B. シャープらニュージャージーのグループに大きく二分された、野外教育運動発展の時代といわれるようになった。さらに、ニュージャージー州立自然保護学校開設 (1949年) や、北イリノイ大学の野外教育活動の指導と指導者養成のための野外演習場 (Lorado Taft Field Campus) 開設 (1950年)、野外教育協会発足 (1951年)、野外教育計画 (The Outdoor

Education Project, 1955年)の策定等、公共高等教育機関が野外教育の重要性を認め始めた。学校キャンプが普及し、野外教育活動の指導に、教本やガイドブック、ハンドブックが使用され、標準化が進展した。そして、学校教育のカリキュラムに即した計画性のあるキャンプが主流になった。

現在では、ペンシルヴェニア州立大学シェイバークリーク・アウトドアスクール(アメリカを代表するアウトドアスクールの一つで伝統的に年間プログラムを実施している)が、予算の削減・施設の老朽化・専任教授スタッフの解雇等の理由で、春・夏の2シーズンのみ開設になっている。かつては州内6大学の教員志望学生は1週間の実習をしていたモンクレア州立大学のスクール・オブ・コンサベーションが、現在州の補助金カットのため1大学のみ必修となり、小学生のキャンプ期間も4泊5日から2泊3日に縮小している。

4. 野外教育の目標とねらい

野外教育とは、教育の諸目標を達成するために天然自然や野外を最高度に活用しようとする教育方法である。野外教育の目標は、自然に対する興味・関心の醸成、自然と人間の望ましい在り方の理解、自然体験活動の楽しさや技術の習得、自主性、協調性、社会性、創造力、判断力、忍耐力、責任感の育成など、様々な目標がある。これらの目標を達成するためには、まず野外にでることが必須条件である。

ルソーはエミールの中で、「我々の最初の科学の教師は、我々の足であり、手であり、目である。だから、考えることを学ぶには、我々は、手足や、感覚や、諸器官を使わねばならない。これは我々の知性の道具なのである」と、感覚の重要性を述べている。

「沈黙の春」の著者レイチェル・カーソンは、この感性を、センス・オブ・ワンダー(人間を越えた存在を意識し、畏れ、驚嘆する感性を、育み強めていくこと)と表現している。両者とも、幼少年期に、野外にでて、自分自身の、足で歩き、手で触れ、目で確かめ、

身体全体で自然を感じる重要性をいっている。

いずれにしても、このような感性を身につけるためには、感覚が繊細で柔軟な幼少年期・青年期に、自然の中で自然に直接触れることである。色々な制約があるだろうが、学生達を自然の中に連れ出すことである。

野外教育の目標を端的に表現すると、自然を愛し、自然を畏れ、自然を尊敬する人間を育てることだと言える。宇宙船地球号という運命共同体で、人類という一つの種が急激に増加している。我々人間が英知を結集し、この激しい変化を乗り越えていかなければならない。“Think Globally, Act Locally.”といわれるように、地球規模の視点を持ち、自分達が住む地域で行動することが、どのような場合でも必要とされる。

5. まとめ

大学体育の基本的目標は、『学生の心身の調和的発達を促し、心身の不調に対応できる体力の養成を図ること、健康やスポーツに関する科学的理論に裏付けられた運動実践を行えるようにすること、さらにスポーツの文化的価値(教養としてのスポーツ、文化としてのスポーツ)についての理解を図ることを通じて、スポーツがその学生にとって生涯にわたって心身共に豊かな生活を送るための糧となるよう、学生の体系的認識や実践力を育てることが大切である』である。大学体育でも、単なる野外における技術・技能の修得だけでなく、自然・地球環境を考え、新しい人間関係を考える機会を持てる野外教育プログラムを取り入れていくべきであろう。

引用・参考文献

1. 森井利夫監修 東京 YMCA 野外教育研究所編：野外教育の理論と実際、学文社、1996。
2. 江橋慎四郎、今井鎮雄編：キャンプの基礎、日本 YMCA 同盟出版部、1986。
3. 江橋慎四郎編著：野外教育の理論と実際、杏林書院、1987。
4. 大阪府キャンプ協会大会実行委員会：第6回全国キャンプ大会 Japan Camping Workshop in Osaka '96報告書、13-20、1997。

短期大学での体育科目の現状と野外教育導入の問題点

精華女子短期大学 宇部 一

はじめに

大学設置基準の改正後現在に至るまで、大学体育の実技授業は、1) 従来の内容に加えて高校以前では経験してこなかったスポーツ種目の導入とより専門的な技術指導、2) 健康や体力の保持増進を目的とした運動の実施や調査測定の実施、といった大きな2つの方向性をもってきたように思われる。いずれかの方向性の選択、あるいは同時進行とするかの対応は各大学で様々といえるが、前者の方向性を重視する中では様々な野外活動が導入されてきていると感じる。

しかし、特に短期大学では科目名称の変更は多くの大学でなされているものの、その内容は従来のスポーツ種目選択、あるいはそれにプラスして後者の味付けがなされたものがほとんどで、カリキュラムの上での野外活動種目の導入はほとんどみられない。そこで、ここでは短期大学での体育科目の現状を紹介したうえで、野外活動の導入の問題点について示していきたい。

1. 福岡県内の短期大学での体育科目の現状

(20短大のシラバスから)

実技および講義ともに必修は8短大、実技・講義ともに選択となっているのは6短大で、他の短大は学科・専攻あるいは実技と講義で必修と選択が分けられている(しかし、保育士や教職免許での必修のため実際には7~8割程度の学生が必修で履修しているものと考えられる)。授業の形態としては、通常の週1コマの開講であり、集中講義の形式のものはほとんどみられなかった。

2. 野外活動の実施状況

学外での授業実施では、ボーリング、ゴルフ、スケート、水泳、ビーチバレーボール、大学周辺散策などがあつた。体育科目以外でキャンプやネイチャーゲームを取り入れている短大がみられた。シラバス上に、「希望者に対して冬季にスキー実習を行う」といった記述が1短大にのみあつたが、知りうるかぎりでも5短大以上が「スキー実習」を行っている。これらの短大では、いずれも単位の認定をとまなう授業としてではな

く、「体育に関するプログラムの提供」といった形がとられており、場合によっては大学側はまったく関知しない、教員個人の責任において実施されているケースもある。

3. 野外活動実施上の問題点

最も短大で一般的に行われてきたスキー実習を例に、その問題点を以下に示した。

1) 事故等に対する責任

ほとんどが私学である短期大学においては、野外活動やその他の研修旅行に対して、事故等の発生時の補償の問題から、実施に対して経営者側からかなり消極的態度がとられるケースがある。ゆえに、公務としてではない「スキー実習」の企画運営がみられた。

2) 費用

引率および指導者に対する旅費の支給がなされないケースが多い。公務でないケースでは当然であるが、教授会承認の「スキー実習」であっても教員旅費は参加学生による負担となり、技術指導上の上から考えると、7~8人で1人の教員の旅費を負担することとなると学生の参加費用の負担が多くなる。また、授業とすれば当然大学側より支給されるが、その旅費負担に対しても消極的な大学がある。

3) 授業として「野外活動」を行うこと

短期大学での体育科目は前述の通り、週1コマの授業形態で、日常的なスポーツの実施や健康管理に主眼が置かれ、その必要性の裏付けと授業時数の確保に力が注がれてきた。野外活動のように集中講義形式の授業が選択肢に含まれることは、カリキュラムがすし詰め状態の短期大学においては逆に歓迎されることも考えられるが、現在の短期大学で考えられている前述のような体育の目的を損なう恐れを含んでいる。また、授業として行うためには上記1) 2) の問題の解決も必要となる。

4) 教員の取り組み

少ないスタッフと費用等の制約の中で、「野外活動」の必要性を論じて大学側の理解を求め、企画・運営をしていくためにはかなりのエネルギーを必要とし、明

らかに仕事を自ら増やすこととなる。また、教員は自らが経験した活動、指導できる活動の範囲をなかなか超えることができないといった側面がある。指導まではできないまでも、より様々な野外スポーツの経験が大学の教員側にも必要となる。

5) 参加学生

様々なところで学生の「大学離れ」が論議され、体育・スポーツに関してもそれは大きな問題となってきた。確かに学生の自然スポーツ指向は高まっていると思われるが、大学の「授業」や「行事」で参加しようとする学生は少なくなっている。各短大の「スキー実習」も年々参加者が減少し、平成10年度以降は中止となったところが多いと聞いている。これには、スノーボードの流行、経済不況などの理由も含まれるが、最も大きな要因は学生の「大学離れ」にあるとも考えられる。

4. 今後の課題

「昔はキャンプもスキーもやっていた」が現実であるが、文部省による体験学習の重視と、アウトドアブームにおける野外での安全管理の知識の必要性からも、今後は大学体育における野外活動の必要性はさらに高まるものと考えられる。しかし、前述してきたようにそれを実施していくには問題が多く含まれており、特に短期大学においては様々な意味で「余裕」が必要のように感じた。

また、一方で他の学問領域での「自然・環境学習」活動と融合した形で取り組むことも望まれる。著者の所属する精華女子短期大学の幼児教育科においても平成13年度より、専門教育科目の中に「自然環境と身体環境」という特設科目群を設け、その中で「野外活動」が実施される。そこでは環境学の専任教員との合同企画で授業が展開される予定である。詳細については全く未定の段階であるが、その中でも体育としてどのように貢献できるかを考えていきたい。

高志館高校における体育授業の実態

高志館高等学校教諭 松 雪 誉

1. 高志館高等学校紹介

佐賀県立高志館高等学校は、昭和9年に農芸学校として開校し67年の歴史があります。平成6年には普通科系の国際交流科の新設に伴い、校名もそれまでの佐賀農芸高等学校から高志館高等学校と改められ、現在は4学科（園芸工学科・緑地土木科・食品流通科・国際交流科）各40名定員の1学年160名、全校生徒480名の小規模な総合高校です。

佐賀市北部の自然と歴史の町、佐賀郡大和町にあり（図1）、校地面積約6万㎡と恵まれた環境の中で「高志潔心」の校訓のもと、アーチェリーやボクシングなどの部活動をはじめ、就職・進学においても年々実績をあげています。

2. 本校の選択制体育授業の実態

本校の保健体育科は表1の年間計画により授業を行っており、体育は2クラスを1体育学級として、3名の教師によって選択制体育授業を実施しています。

水泳は、各人が「新しい泳ぎに挑戦するグループ」「今できる泳ぎでより長く泳ぐグループ」「今できる泳ぎでより速く泳ぐグループ」に分かれて、自分たちで活動を計画し学習する“種目内選択”によって授業を行っています。

また、武道（柔道・剣道）・ダンスは、性別にこだ

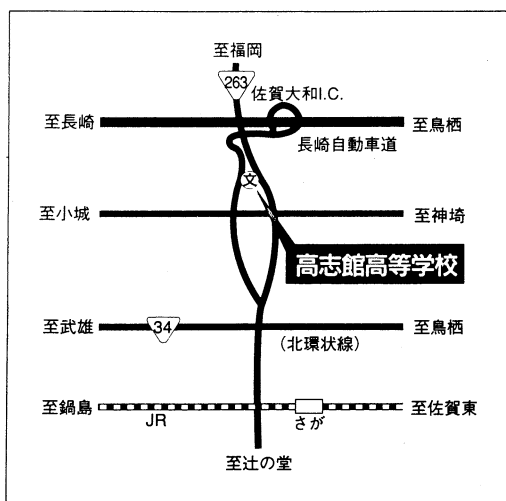


図1

わらず、“領域間選択”により授業を行っています。

以下、時間数も多く、典型的な“領域内選択”の授業である球技Ⅰ・Ⅱの授業の実態について少し詳しく述べてみます。

《オリエンテーション》

それぞれの単元に入る時には1～3時間をかけて、選択制体育授業の趣旨や開設種目の説明、グループピング、評価観点の説明などについてのオリエンテーションを必ずおこないます。

種目決定においては、あらかじめアンケート（図2）を実施して第1希望から第3希望までを理由とともに回答させ、振り分けをしておきます。施設用具等の物理的条件により必ずしも第1希望の種目を選択できるとは限りませんが、オリエンテーションの中でなるべく納得させるようにします。

選択制授業のためのアンケート（球技1）

科 年 号 氏 名 _____

選択制球技1の授業を5月～6月中旬に実施します。
 予定種目は、ソフトボール、バレーボール、テニス、卓球の4種目です。
 希望によって学習種目を決定しますので（ただし、種目によっては施設や道具の状況によって第1希望からはずれることもあります。）、次の質問に答えてください。

- 球技1で希望する運動種目は何ですか。
 希望する運動種目を上記4つの種目の中から選んで書きなさい。

- ・第1希望 ()
- ・第2希望 ()
- ・第3希望 ()

- 希望した理由は何ですか。
 理由を次の6つの中から選んで番号で答えなさい。
 その他の理由の時は、その理由を書きなさい。

- ①得意だから
- ②好きだから
- ③上手になりたいから
- ④したことがないから
- ⑤友達に勝れたから
- ⑥その他

- ・第1希望の理由 () その他 ()
- ・第2希望の理由 () その他 ()
- ・第3希望の理由 () その他 ()

- 球技1の授業について、先生や友達に希望することがあったら書いてください。

.....

.....

.....

図2

平成11年度 保健体育科年間計画表

佐賀県立高志館高等学校

		4			5				6				7				9				10				11				12				1				2				3			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35								
1	男・女	3	体育理論	球技 I				水泳				陸上競技				武道				球技 II																								
			体操	バレーボール・卓球 ソフトボール・テニス				器械運動				ダンス				サッカー・テニス・バスケットボール バドミントン・卓球																												
		1	保 健																																									
2	男・女	2	体育理論	球技 I				水泳				陸上競技				武道				球技 II																								
			体操	バレーボール・卓球 ソフトボール・テニス				器械運動				ダンス				サッカー・テニス・バスケットボール バドミントン・卓球																												
		1	保 健																																									
3	男・女	2	体育理論	球技 I				水泳				陸上競技				武道				球技 II																								
			体操	バレーボール・卓球 ソフトボール・テニス				器械運動				ダンス				サッカー・テニス・バスケットボール バドミントン・卓球																												
体育的行事			スポーツテスト				高校総体				クラスマッチ				体育祭				クラスマッチ				校内マラソン																					

表1

《グループ学習ノートの活用》

本校の選択制体育授業では、“実技の教科書”の他、“個人評価票”と“グループ学習ノート”(図3)を使用しています。

授業が始まったら教師からグループ学習ノートを受

け取り、あらかじめ(前時に)立てておいた「本時の目標」と「活動計画」をグループ員で確認してから活動に入ります。

授業の最後には、「ゲームの結果」や「グループ全体の反省」を記録し、「次の時間の目標」や「活動計画」を立てて教師に提出をし、授業が終わります。

《個人評価票の活用》

グループ学習ノートを補うために、“個人評価票”(図4)も使用しています。

これは、種目毎に作成しており、一人ひとりに学んで欲しい事項・実践して欲しい事項について4段階あるいは2段階で自己評価してもらい、それらを意識しながら学習してもらいたいと考え記入させています。授業が進むに従って得点が上がっていきます。

毎授業時間の最後に自己評価をし、週に1度提出してもらっています。

《活 動》

自分たちで立てた活動計画に従って活動を行います。

原則としては、よりレベルの高いゲームが楽しめるように、授業の前半には個人やチームでの技術練習が入り、後半にゲームを楽しみます。しかし、ゲームは正式ルールにこだわることなく、メンバーの数や能力に合わせてルールを工夫させています。

また、活動中は生徒の自発的な活動を尊重するために、授業の初めに整列して教師を待たせることや、特に危険がない限りできるだけ途中で学習の流れを止め

月	日()	曜日	時限目	記録者
欠席者			見学者	
服装忘			早退者	
本時の目標				
活動計画(練習内容や方法・技能的なポイント等)				試合結果
0	準備・出欠確認・学習内容の確認 準備運動()			() () —
-10				() () —
-20				() () —
-30				() () —
-40				() () —
-50	後片付け・ノートまとめ			() () —
グループの反省				
項 目			○△×	() () —
始業のチャイムと同時に活動が始められたか。				() () —
次の授業に全員が間に合ったか。				() () —
活動を理解し、目標に向かって努力したか。				() () —
目標達成のために協力して活動できたか。				() () —
楽しく活動ができたか。				() () —
服装を整え、安全に活動できたか。				() () —

図3

小学校の体育の授業づくりの視点

武雄市立若木小学校教諭 藤井裕明

小学校体育の学習内容は、その運動に対してプレーヤーが持っている欲求を充たすようにするものである。

例えば、跳び箱運動で、学習内容を考えてみる。プレーヤーの欲求は、新しい技ができるようになりたい、或いは、できる技をより大きな動きでできるようにしたいというものである。このような欲求を充たすことが学習内容となる。つまり、技そのものであり、技ができるようになるための技術、できるようになるための用具の使い方（場の工夫）等が学習内容となる。そして、ひとり一人のプレーヤーが自分の欲求を充たすようにするためには、各自が、技を習得するための手順、つまり、学習の仕方も学んで行く必要がある。自分はどんな技に挑戦したいかというめあてを持つこと、そのめあてを達成するためにはどの場で学習したらよいか、どういう状態が「できた」といえるのか（評価の基準）、できない場合はどうするか等である。或いは、学習しやすい人間関係も学ぶ必要がある。それはどういうものかと言えば、自分の体の動き、つまり動きが分からない場合、友達に見てもらおうこと、跳び箱を高くしたり、低くしたり、マットを多くしたり、少なくしたり等、場を変えたい時、友達に手伝ってもらおう、大勢で学習しているので、跳ぶ順番は守る等、マナーも含めた人間関係を学んで行くべきである。

よって、学習内容は、運動種目それ自身（技術・戦術、ルール、マナー、施設・用具、集団）とかつ、その種目への自発的学習の仕方となる。また、ここでの「技術・戦術、ルール、マナー、施設・用具、集団」には、それぞれの頭に、「よりその運動を楽しむための」という言葉がつく。

ただし、認識力、技術を高めていくことを無視しているのではない。むしろ、よい体育を好きにさせるためには、少しでもそういった力を高めていくことも必要である。そこで、筆者が行ってきた手立てを、ボール運動で紹介すると、次のようなものであった。

①記録を取る。

チームの中でゲームに出場していない子に、自分の

チームの触球数、ボールの軌跡、得点数などを記録させた。ねらい2の段階で、相手チームの分析をしたい場合は、相手チームの触球数、ボールの軌跡、得点数等も記録させた。

②記録から何が分かるか考える。

ゲーム中に取らせた記録から自分達が気づいたこと、分かったことを作戦タイムや反省、まとめの時間に考えさせ、発表させた。給食指導としてはあまり良くないと思うが、給食時も大いに使った。チームで給食を食べる。キャプテンが司会を務める。話し合う内容は、記録分析、つまり、記録から分かることである。Aちゃんには、パスがあまり渡っていないとか、B君とC君との間はよくパスが通っているとか、左サイドをよく使って攻めているとか、この辺からはよくシュートが打っているとか、そういう事実を見つけるのである。

③VTRを観る。

給食時などを使って、授業時間に写した子ども達のゲームのビデオをクラス全体で見る。ナイスプレーや教師が特に見てもらいたいと思っているプレー（問題あるプレーを含む）は、ビデオを止めたり、繰り返したりして教師の説明を加える。VTRを観ることで、攻め方のイメージができるようである。

④今日の得点を画用紙に書く。

今日のゲームの中で、自分達が得点したもののの中から1つか2つ自分達で選んで、シュートが入るまでの軌跡（ボールやプレーヤーの軌跡）を八切り画用紙に書く。そして、その得点の仕方に自分達のチームでネーミングをする。その後、その画用紙を体育館、または、クラスの掲示板に貼っていく。チームの財産であり、クラスの財産となる。

⑤日記に書く。

体育の授業があった日は必ず、日記を書かせるようにしている。この時の題は、ほとんどが「○○運動をより楽しむために僕・私が言いたいこと、提案したい

こと」である。ゲーム、あるいは、ボール運動の時は、特に自分の、そして、チームの、あるいは、相手チームチームのナイスプレー、または、逆に困ったプレーなどについて書かせている。そして、クラス全体で考えてもらいたい時には、帰りの会等に、みんなの問題として出し、考えてさせた。主に、人間関係の問題が多かったが、戦術(作戦と子ども達には言っていた)に関するものも考えさせた。

⑥学級通信に書く。

学級通信を書くのは、教師の仕事である。授業の様子、教師の気づき、子ども達を書いた日記等を載せている。次のようなものである。

「6年3組 M.I『サッカーⅡに向けて』サッカーⅠでは、結構ボールが回り、シュートも結構入った。でも、もっともっとシュートを入れたい。それには、みんながもっと横パスや縦パスを使ってゲームをする。そのためにもっと練習する。そして話し合いをみんなでするしかない。これらを生かしてサッカーⅡをがんばるぞ。」

それに対する教師の言葉は、「ボールゲームで、ボールの軌跡を追っていくと、ゲームの様相の高まりを説明することができます。まず、第一段階では、ダンゴ状態です。コート中、ボールが行く方へみんなが動き回ります。みんながボールに触りたいと願っているからです。第二段階では、縦パスがゴール目掛けて飛び交います。ゴールキーパーのキックがゴール前で待つ味方のプレーヤーへ渡り、シュートできる状況や、そのまま相手チームのキーパーへという状況も生まれます。この状況は、サッカーⅠ(7時間単元)で良く

見られたゲームの様相ですよ。そして、次に高まった状態が、横パスの使用です。ボールを持って上がる人の横に誰かがついて走ります。この横パスが高まったものがセンタリングといわれるものです。外から中へ(逆サイドを走ってくる味方へ)の折り返しのパスです。サッカーⅠの6、7時間目に時々出てきましたね。サッカーⅡではこんな攻め方が良く見られるようになるといいね。第四段階は、斜パス、横パスで、右から左へ、左から右へというように、逆サイド、逆サイドへとボールを大きく展開させて攻めていくパターンです。そして、最も高まった最終段階が、その場その場に応じて、縦パス、横パス、斜パス等が自由に出てくるゲームです。ここまでは大変だよ。でも近づきたいだろう。M君が言うように、話し合おう、そして練習しよう。キーワードは、『サッカーをより楽しむために』、そして、『考えながら』だよ。」

⑦シュートの有効空間が実感できるゲームをする。

二人組を組む。一人がコート上の好きな所からシュートを打つ。時間は3分間。入ったら、シュートの入った地点にもう一人の子がマークをする。マークは、少し厚めの画用紙などにする。3分経過したら、交代して同じようにシュートをしていく。二人とも終わったら、みんなでコート上のどの地点にマークが多くしてあるかを見る。

上記のことは、あくまで、より運動を楽しむために行った手立てである。

以上で論を閉じるが、こういう発表の場を与えて頂いた九州地区体育連合理事長の市川先生を始め、諸先生方に感謝したい。

シンポジウムを振り返る

佐賀大学 福本敏雄

大学教官は学生の教育及び研究を仕事として位置付けられている。しかし、昇格の条件として研究業績が重視されるなど、教育と研究を両立させることが困難な状況にある。このような中、教育改革の一つとして大学の自己点検評価が叫ばれ、その一貫として学生による授業評価導入が実施・検討されている。「教師が評価する人、学生は評価される人」の時代から「教師と学生が授業を通してお互いに評価し合う」時代へとなってきた。そして、学生による授業評価を誰が、どのように利用するかが問題となっている。

大学教官はその道の専門性を問われ、教員免許を必要とはしない。そして、学生を対象とする教育方法についてその講議を受けた教官は少ないと思われる。教育法の具体的テクニックという点では小・中・高等学校の現場に学ぶべきヒントがあるのではないかと。

本シンポジウムでは「小学校・高等学校の体育授業から見えてくるもの」をテーマに藤井裕明先生（武雄市立若木小学校教諭）と松雪誉先生（佐賀県立高志館高等学校教諭）が実践されている授業についての発表をお願いした。

藤井先生は学校期を生涯スポーツの一時期として捉え、生涯スポーツとしての学校体育という視点から自発的学習の重要性を指摘された。そのためには運動の特性を児童の興味・関心や運動の持つ魅力・価値から捉えた「機能的特性」を重視すること。児童一人ひとりの欲求を大切に、それを保障した授業を展開すること。また、「学び方（学習の仕方）」を学習することが大切であると力説された。

そして、自発的・自主的学習に欠かせないものとして児童の能力に応じたためあてをもつための学習資料及びめあてを達成するための学習資料（運動技術・練習方法、学び方などに関する資料）が重要な意味を持つということで、先生が授業で作られた資料を提示された。また、とび箱運動の授業をビデオで紹介され、子どもそれぞれに自己の力に応じた技を選択させて行っていること、技能の低い子どもに大きな配慮をしていることが発表された。

松雪先生は選択制授業の現状についてスライドと資

料により発表された。

施設・用具及び教師数（3人）で開講種目を決定し、年間カリキュラムを作成する。アンケートで生徒に選択させるが、できるだけ生徒の希望を叶えるために一人の教師が複数の種目を担当したりして対応しているが、希望どおりにならない生徒もでてくること。授業については「正式ルールにこだわらず、スポーツを楽しんでもらいたい」という姿勢で行っていること。意欲の低い生徒に対しては教師が相手をしてやるなど教師も一緒に参加していること。ルールを生徒の力にあわせて簡易化（テニスは2バウンドOK、4対4のサッカー）したり、剣道場で卓球をしたり、ゴールを作る（サッカー）など施設・用具の不足に苦慮されていること。また、学習資料（グループノートや個人ノート）を種目毎に作成され、毎時間、生徒の自己評価活動（学び方や技能についてフィードバック）の指導に活かされていることなどが発表された。

討論の中で九州東海大学の米沢先生から評価の方法と観点の質問があり、学び方や技能の伸び、意欲態度を重視している旨の回答があった。また、高校では、学習ノートの整理が大変であること及び種目間の調整が大変であることが報告された。

佐賀短期大学の久富先生から「中間づくり」についての質問があり、体育の場合に運動が苦手な子が仲間に入りづらくなっており、教師ができるだけ声をかけている旨の回答があった。九州大学の徳永先生から体育では健康や体力の維持・向上を大切にすべきであるとの意見があった。また、九州国際大学の上田先生から器械運動の授業（ビデオ）について児童が全員一つの技でなく、それぞれいろいろな技にと取り組んでおり、怪我しそうな児童もいたが危険はないかとの質問があり、今まで怪我はないとの回答があった。

4人の質問・意見で時間切れとなった。司会のまさきを陳謝すると共に、本シンポジウムの感想を以下に述べてみたい。

両先生は佐賀県内でも体育学習についてよく勉強されている優秀な先生である。佐賀県内すべての学校でこのような授業が展開されている訳ではない。体育の

授業は「子どもを遊ばせておけば良い」とか「体力がつけば良い」とか「基礎技能が身につけば良い」といった教師の体育観を一方的に押し付けている授業も多いのである。両先生の授業は子どもをロボットとして扱うことなく、一人ひとりの個性を大切に、子ども個々の学習を保障された授業といえよう。

国民のほとんどは実践したり、観戦したり、雑誌や新聞を読んだり、ファッションを真似したりなど何らかの形で運動やスポーツに接している。

実践においては、①仕事として（プロスポーツ）、②勝利を目指す競技者として（チャンピオンスポーツ）、③スポーツそのものを楽しむスポーツ愛好者として（プレイスポーツ）、④地域の人々との親ばくを深めるために（コミュニティスポーツ）、⑤健康や体力の回復・維持・向上を目指して（フィットネススポーツ）、運動やスポーツに取り組んでいる。

学校教育の一教科としての体育科の存在意義は国民全体に健康や体力の維持・向上を保障することと運動やスポーツ文化を教育することであり、授業においては上記③④⑤の運動やスポーツを愛好する人間を育てることにある。

健康や体力の維持・向上は運動を継続して行う必要がある。そのためには運動やスポーツを通して、その

必要感を認識させるだけでなく、運動そのものの持つ楽しさや喜びを体験させる必要がある。しかし、運動やスポーツには身体的・心理的に苦しさは伴う。この「苦しさ」が「楽しさや喜び」を上回れば医者に脅されない限り運動を継続しようとは思わない。すなわち学校期において完成させる（過去の鍛える体育）ことから生涯を通して完成させるという考え方（生涯スポーツ）に転換する必要がある。この意味で両先生が力説される「学び方」の学習の重視は示唆を与えてくれる。

学校体育では上記②を部活動として行っているが、その方法は授業と区別する必要がある。部活動で大会に出場するためには公式ルールに生徒を合わせる必要があるが、授業では一人ひとりの子どもの今の技能にルールや方法を合わせるべきであろう。大学体育においても公式ルールでゲーム行いたい学生や簡易ルールで行いたい学生、基礎技能を習得したい学生など様々である。これら多様な学生の学習を保障する方法が検討される必要があるだろう。小・中・高校の評定は絶対評価を加味した相対評価ということで先生方は、考慮されている。大学体育では教官の絶対評価が可能であるが、教官によって評定が異なるのはなぜかという学生の声がよく聞こえてくる。

運動に伴う一過性のポジティブな感情の増加とメンタルヘルスの改善・向上との関係

九州大学健康科学センター 橋本公雄

九州大学人間環境学研究科 渡壁史子

目 的

長期的運動のメンタルヘルスに及ぼす効果は、一過性の運動に伴うポジティブな感情の増加の蓄積によってもたらされると考えられるが、そのようなことを明らかにした研究は見当たらない。そこで本研究では、週1回、90分間の体育実技実習を用いて、種々の運動に伴う一過性のポジティブな感情の増加を調べるとともに、その一過性の感情の変化がメンタルヘルスの改善・向上に影響しているかどうかを明らかにすることを目的とした。

方 法

1. 対象：対象者は平成11年度後期に開講された健康・スポーツ科学実習の「快適運動コース（選択科目）」を受講した男女学生28名である。
2. 実施期間：平成11年10月18日～平成12年1月31日
3. 授業内容：授業は運動の快適性を追及することを目的としたもので、運動種目は学生に選択させ、教官とティーチング・アシスタントで担当した。運動種目は、アーチェリー、レクリエーション・トレーニング、卓球（3回）、ソフトボール、ボウリング、エアロビック・エクササイズ、フライングディスク、アルテミットの8種目であった。

4. 感情およびメンタルヘルスの測定

感情の測定には、橋本・徳永（1995）が作成した感情尺度（Mood Check List-3: MCL-3）を用い、授業の前後に調査した。また、メンタルヘルスの測定には、橋本ら（1994）が作成した精神的健康パターン診断検査（Mental Health Pattern: MHP-1）を用い、学期始め、中間、そして学期終了時の合計3回調査した。MCL-3尺度は、こだわり、注意散漫、対人緊張、対人回避、疲労、睡眠・起床障害、生活満足感、生活意欲の8つの下位尺度からなっている。

結果と考察

1. 感情の変化

MCL-3尺度の快感情、リラックス感、満足感の尺度得点の変化をみるため、繰り返しのある一要因分散分析を行なった。その結果、運動の種目に関係なく、快感情、リラックス感、満足感のすべての感情において有意な主効果がみられ、授業後にポジティブな感情は増加した。

2. メンタルヘルスの変化

MHP-1尺度の下位尺度得点の変化をみるため、繰り返しのある1要因分散分析を用いて検討した結果、8つの下位尺度とも時間要因に有意な主効果は認められなかった。しかし、社会的ストレスの「対人緊張」の下位尺度においてのみ10%水準ではあるが、得点が低下する傾向がみられた。つまり、学期前・中・後と授業が進むにつれて尺度得点が低くなる傾向がみられた。

考 察

本研究では、運動種目に関係なく、すべての授業においてポジティブな感情は増加したが、後期の授業を通じて顕著なメンタルヘルスの改善・向上はみられなかった。したがって、一過性の運動に伴うポジティブな感情の増加がメンタルヘルスの向上・改善に関係しているということは明らかにできなかった。ただ、対人緊張のみが学期を通じて改善する傾向がみられたので、運動でポジティブな感情を経験することは、対人関係の改善に有効であるかもしれない。メンタルヘルスの改善・向上を促すのに、週1回の運動では足りないかもしれない。今後の課題として、週平均の運動実施の頻度を増やし、運動に伴う一過性の感情の変化とメンタルヘルスとの関係を明らかにする必要がある。

大学体育におけるアルティメット(Ultimate)実践の検討 — 大学生の学び —

中村学園大学・短期大学部 中島 憲子

1. はじめに

「私はテニスに専門だから、選択種目はテニスにしよう」という私自身の種目決定に疑問を抱いていた。授業を担当するにあたっては環境や人的条件等にも制限はあるが、専門であるがゆえに見えているつもりで授業を展開させていることがあり得る。他の教材から学び直してみたいと考えていた。そこで、フライングディスクを用いた集団ゲームであるアルティメット(Ultimate)^{注1)}を教材として取り上げた。そこには、①対象の学生は競技としてディスクを扱った経験がないため、経験差による優越感・劣等感が少ない。②バスケットボールのドリブルを省いたパスのみの展開に似ているので、導入に時間がかからない。またそのためにワンマンプレーが出現しにくい。③ゲームを行うには、「パスとキャッチ」が成功することで進展するため、必ず技術練習が伴うことからグループにおける練習活動が成立する。④審判がつかず、プレーヤー自身がジャッジを行うため、フェアプレー精神を高めることができる。⑤ボールと違って、筋力のない女子学生でも、ディスクの特徴である空気抵抗をうまく利用して浮遊させるコツを身に付ければロングパスなどを狙って得点することができる、等といった理由があったからである。

これらに加え、私自身の「アルティメット特有の技術や戦術などの変化・発展によって生み出されるゲームの面白さを、個人もしくは集団として味わうことができれば」という願いが実践に取り組むきっかけでもある。

2. 実践スタイル

- (1) 対象：中村学園大学児童教育学専攻1年生履修者98名のうちのアルティメット選択者23名(男子5名、女子18名)。
- (2) 期間：1999年9月～2000年1月。週一回の授業。合計12時間。(表1)
- (3) チーム編成：チーム編成は学生が行い、男子は出来上がった女子の4チームに一人ずつ入った。(◆にこちゃん◆健弘だいいち◆Monkey ◆Blue Comets の4チーム、にこちゃんのみ男子2名)

- (4) 学習記録：毎時間、グループノート(欠席者、見学者、本時のめあて、学習内容、話合った事、来週の計画、各自の反省や感想)を記入。その記録や感想をもとに教師が「アルティメット通信」を毎時間開始時に配付。

- (5) 全実践終了後：レポート課題。

3. 変化・発展の気づきを導くための視点とその成果

- (1) ディスタンスで個人技術を確かめる

授業開始後の約10分程を使い、各チームでディスタンス記録を取った。スナップの使い方や腕の振り方など、記録と仲間のスローをもとに改善・更新していき個人技能の向上を確かめる材料とした。

- (2) 基本的技術、されど感動

ディスクの基本的技術は教師が最初に紹介したが、伸び悩んでいた4時間目にVTR^{注2)}を見せることにした。学生同志のまっすぐに飛ばないディスクとは裏腹に、テレビ画面で繰り広げられるパフォーマンスの正

表1 アルティメット実践全体

	月日	授業内容及び展開
①	10/14	・オリエンテーション ・種目選択後4チーム作成 ・ディスクの基礎練習 ・フリスビードッグ(人間版)
② ③	10/21 + 補講	・ディスタンス① ・試しのゲーム(6:6) ・小学生のビデオ鑑賞 ・ゲーム(4:4)
④	10/28	・NHKビデオ鑑賞 ・ディスタンス② ・2メンパスの練習 ・2:1の練習
⑤	11/11	・ディスタンス③ ・野球型ゴール前ゲーム(チーム内・チーム外)
⑥	11/18	・ディスタンス④ ・野球型ゴール前ゲームで練習 ・ゲーム(ゴールマンあり、なし)
⑦	11/25	・ディスタンス⑤ ・ゲーム(ゴールマンあり、なし)
⑧	12/2	・ディスタンス⑥ ・ゲーム(ゴールマンなし)
⑨ ⑩	12/9 + 補講	・ビデオ確認 ・ディスタンス⑦ ・ゲーム(ゴールマンなし)
⑪	12/16	・ゲーム(ゴールマンなし) ・レポート課題配付
⑫	1/13	・2チーム合同の最終ゲーム ・レポート回収

確さ、スピード、安定性、そしてカーブなど思い通りになるディスクに、あっけにとられた学生は驚きを見せた。そこで「回転」「角度」「方向指示」の三つのポイントをおさえた後、グラウンドへ出てワクワクしながら思い思いのパス練習に取り組んだ。

(3) 野球型ゴール前ゲーム^{注3)}で最終局面のイメージを形成する

ゴールシーンの意図的な設定により、作戦や戦術的な側面に取り組めるきっかけとなるようにした。ここでは、パスのつながり図をゲームと同時に記入し、成功パスの数、カットもしくはキャッチミス箇所という客観的データを取った。そしてデータを読み取る時間を設定し、それをゲームに活用できる手助けとして利用した。ある学生の感想に、「やはり点数とパスの数は比例していた。だから点数をとることよりもパスを通すことを考えてやろうと思う」といった、データを得点と照らし合わせて考察している記述もみられた。

(4) 時間軸と空間の存在

終盤になるにつれ学生たちの悩みが「ディフェンスのかわし方」に絞られてきたため、9時間目にVTRにおける2対1の練習場面をスロー再生で数回行なった。ここでは、「オフェンスがどうやってディフェンスを躲しているのかじっくり探ってごらん。ポイントは位置とタイミング。そしてキャッチの成功する理由は？」と告げると学生は黙って画面に見入った。4回目のスロー再生の頃、ある女子学生が「わかったあ！」と言いながら、グラウンドへ走り出したことがあった。まさに、ディフェンスを躲すために、“いつ”スロワーがフェイントを使って“どこの”フィールダーへパスを出すか。それからフィールダーは決して止まった状態でパスをもらっていないということ。また、フォアハンドスローを使うことが有効だということに気が付いたのである。

(5) ゲーム大会

最後は全チームのリーグ戦を行なった。最も感動的だったのは、全勝のにこちゃんに、全敗のBlue Cometsが同点でゲームオーバーになった瞬間である。Blue Cometsは物静かなチームで、練習やディスタンスの時も一番端のほうでコソコソとやる仲良しチームである。勝ち星のないBlue Cometsに対して実践の中盤の頃、「動きながらキャッチするという予測」と、「投げてみて一番とりやすい距離」を探させる手立てをとると、見事に動きが変わり、最終ゲームにて同点を納めるまでにこぎつけた。初盤はパスさえ通らず攻守の入れ代わりも激しく、6分程のゲームでも息切れの場

面も見られていた。また、ある学生は「ねえねえ、オフェンスって何？」という質問をしていた頃に比べると、終盤は飛躍的に集団ゲームに共通する戦術や技能に対する方法への取り組み方、また「分かってできる」おもしろさを感じるようになったと思う。

(6) まとめのレポートにて

印象的だったのは、全チームの中に「自分のチームが最高だ！」や「どこにも負けないチームだ」といった感想が現れたことである。その中でも印象に残った感想に、【私は体育が大嫌いで、特に球技の時間は私にとって地獄でした。バスケットボールの時は全然動かずゴール下でただボールを待ち、サッカーの時はボールのある方へついていったりして体育の時間を過ごしていました。バレーボールの時もすぐ突き指したと、大して痛くもないのに輪から外れたりと全くやる気を見せたこともなければ、チームのために真剣に取り組んだこともありませんでした。でも今回は「みんなも初めてなのだから私でももしかしたら出来るかも」と少し望みを胸に頑張ってみようと心に決めてはじめました。途中「こんな下手な私でもがんばらなければチームの勝利は絶対にありえない」ということに気づき、私なりに必至で頑張りました。スポーツでチームのために頑張ったのは本当にこれが初めてです】という物静かなBlue CometsのMさんの感想があった。

これまで経験してきた、バスケットボールやサッカーなどの集団ゲームの面白さを別の教材を使って見方を変えたり、一人ひとりの役割認識から教えあい・学びあいの場を生かすことで、これまで取り組んできた体育とは違った自己を発見できたように思う。そしてディスクの奇跡を追うことで分析的にゲームを観察していく視点を獲得することによって、アルティメットだけではなく他のスポーツへの面白さにも気づくのではないだろうか。

注1) フライングディスクを使った種目の中で最も高度で持久力、判断力、瞬発力など、全ての要素が重なりあったまさに『究極』という意味で用いられる集団ゲーム。コートは110m×36m、1チーム7名で対戦し、パスをまわしながらディスクを進めていき、出されたパスをエンドゾーンでキャッチしたら1得点。多くの大会では21点マッチ採用で、試合時間は約1時間半、運動強度は最大心拍数の約80%に達するといわれる位ハードな競技として展開される。

注2) NHK スポーツ教室「フライング・ディスク」1999.10.23放送分

注3) ハーフコートのセンターからエンドゾーンに向けてディスクを運ぶ。エンドゾーンにゴールマンを一人固定したり、フィールド内を2対1や2対2にすることで、ディフェンダーを躲すことも含めてゴール前のイメージを形成するのに最適。センターから3インゴウのうち何得点できるか。そして攻守が入れ代わる。野球のように平等に攻守が回ってくる。

体育学諸研究のキーワードに見る 「今後の大学一般体育を支えるいくつかの概念」

— 文献研究による模索は我々の教育活動に明確かつ有力な視点を投げかけ得るか —

活水女子短期大学 道 向 良

1. はじめに

本研究の目的は、今後の大学一般体育の教育活動において我々が果たすべき役割とは何かについて、その概念となるキーワードを文献資料をもとに模索することである。

2. 研究方法

研究の手順として、(1)最近の体育学研究が全体としてどのようなテーマに興味を持っているのか、その現状を諸研究のキーワードをもとに明らかにし、(2)それらのキーワードが、我々の教育活動にプラスとなる“視点”を投げかけているかどうかを評価し、(3)我々が「いま、そして今後」取り組むべき課題とは何かについて明らかにするという手続きを経るものとする。

対象とした文献は「日本体育学会第50回大会／体育・スポーツ関連学会連合大会大会号」および大学体育連合機関誌「大学体育(第49号～第68号の合計20冊)」である。「日本体育学会第50回大会号」については、抄録に記載されたすべてのキーワードを抽出し、記載のない演題では研究題目の中からその研究の性質を良く表すと思われる単語を1～3語抽出した。機関誌「大学体育」については、「目次」を対象として、「教育研究」および「各種研修会報告」に関する題目の中からその研究または報告の性質を良く表すと思われる単語を抽出した。この際「体育」と「体育学」や「授業」と「授業実践」のように、キーワードが1字でも違うものであれば異なるキーワードとして認識することを原則としたが、「身体に関する知」と「身体知」や「大学体育」と「大学体育機能」などのキーワードのように、表現は異なっても常識の範囲でほぼ同じ事柄を示すと考えられたものについては、同一キーワードと認識するという若干の操作を加えた。学会大会号および機関誌というそれぞれの資料の性格の違いから、抽出の手法は同一とはならなかった。抽出されたすべてのキーワードを表計算ソフト (Microsoft Excel 97) に入力して集計処理を行い、使用頻度の多いキーワード

を抽出した。このようにして得たキーワードをもとに「今後の大学一般体育を支える概念」を模索した。

3. 結果と考察

(1) 最近の体育学研究と大学体育研究はどういうテーマに興味を示しているのか

日本体育学会第50回大会号について、頻出したキーワードを順番に並べたものが表1である。最も多く見出されたキーワードは「高齢者」であり、続いて「スポーツ」、「テニス」、「体力」、「ゲーム分析」、etc.の順であった。「大学体育」のキーワードは7件抽出され、頻出順の序列で23番目に位置した。この7件の演題について「大学体育」以外のキーワードも抽出して並べたものが表2である。「大学体育 (機能)」の次に頻出したキーワードは「21世紀 (2件)」であり、他のキーワードはすべて1件であった。次に、機関誌「大学体育」20冊の中に頻出したキーワードを順番に並べたものが表3である。大学体育研究の最近の興味が「中国養生法」や「スキー」、「からだ気づき、からだほぐし」などの話題に集中している傾向があった。話題の中心は体育学研究と大学体育研究では異なることが明らかとなった。

(2) 諸々のキーワードの中に我々の活動を支える“視点”は示されているか

表2において「大学体育 (機能)」以外に複数回抽出されたキーワードが「21世紀」であった点から、21世紀に向けての関係者の問題意識は確認できるものの、その他のキーワードが1件ずつであった点から、具体策について全体としては不明確な状況にある点が見て取れた。この点を踏まえた上で「今後、我々が充実していくべき活動の方向性を示すもの」を上げると、「健康体育学」、「実習教育」、「身体に関する知」、「スポーツ」のキーワードが浮かび上がった (筆者評価)。また「科目プログラム」、「社会モデル」、「ファカルティ・ディベロップメント」、「レポート課題」などについては、今後の努力目標として掲げることができる性

表1. 日本体育学会第50回大会大会号に見られたキーワードの種類と数 (頻度別集計)

頻度	キ ー ワ ー ド	種類	個数	頻度	キ ー ワ ー ド	種類	個数
26件	高齢者	1	26	8件	競技力向上、競泳、運動強度、	3	24
19件	スポーツ	1	19	7件	ラグビー、歩行、動作分析、大学体育、イメージ	5	35
17件	テニス	1	17	6件	ランニング、野球、評価、バスケットボール、トレーニング、体育科教育、全国大会、成果、水泳、縦断的研究、加齢、因子分析、あり方、3次元分析	14	84
16件	体力	1	16	5件	ライフスタイル、有酸素性作業能、体操競技、大学生、性差、障害者スポーツ、筋電図、ウォーキング、生きる力	9	45
14件	ゲーム分析	1	14	4件	POMS、意識、運動、体ほぐし、身体運動、etc.	38	152
12件	生涯スポーツ、サッカー	2	24	3件	ADL、筋力、身体、身体知、肥満、中高年、etc.	75	225
11件	健康	1	11	2件	からだ気づき、キャンプ、目標設定、乳酸、etc.	199	398
10件	幼児、バイオメカニクス、体育、スポーツ科学、子ども、	5	50	1件	課題解決、角運動量、カルシウム、破局、etc.	1,739	1,739
9件	バレーボール、生活習慣、心拍数、学校体育、運動能力、21世紀	6	54	総 数		2,101	2,933

質のものと思われた。

表3に示したキーワードを概観すると、大学体育関係者の興味はおよそ「中国養生法関連」、「スキーを代表とするスポーツ関連」、「からだ関連」の3つの系統に分けられる。これは先述の「健康体育学」、「身体に関する知」、「スポーツ」とも深く関連するものであり、我々が今後充実して行くべき活動を強く示唆するものと考えられる。

(3)「いま、そして今後」取り組むべき課題とは何か

本研究で見る限りにおいて、「中国養生法（健康）関連^{*1}」、「スポーツ関連^{*2}」、「からだ関連」という3つの大きな柱が、今後我々が充実していくべき活動と捉えて良いのではなかろうか。これらは、これまでの体育学の一般的方向性である「健康」、「スポーツ」、「体力」などといった活動の内容を明確化し、今後我々が具体的に取り組むべき課題を強く示唆するキーワードと言えるであろう（「スポーツ関連」を除く）。これらの妥当性をさらに検討するとともに、上に示したような「ファカルティ・ディベロップメント」をはじめとする具体的な努力目標に取り組んでいくことが我々の急務であろう。

4. 発表を終えて

機関誌「大学体育」において、最近「不易と流行」の話題が取りざたされている。筆者はこれに関連して、中国養生法や身体関連のそれぞれの手法を学び、開発していくのと並行して、活動の中に流れる「不易なもの（哲学的視点）」をも明らかにして、我々の中に取込む試みをしてはどうかと考えている。「不易なもの

」を確実に取り込み、教育に反映することができれば、外的な活動がウォーキングであろうとスポーツであろうと中国養生法であろうと、それなりにポイントを押さえた教育となるはずだからである（この視点に立った教育の実践はこれまでも無数にあったと思われるが）。個人的には、本研究を通して、またこれまでの様々な思索を通じて、「身体のあり方を含めた個人の全体的な感性に働きかける“体育”という視点は今後不可欠であり、「不易なもの」とも深く関わっているのではないかとの感想を得ている。

表2. 体育学会大会号での「大学体育」関連演題に見られたキーワード（あいうえお順）

医科大学	体育
可能性	体育の授業
科目プログラム	大学改革
カリキュラム	大学体育
○健康体育学	大学体育
実技	大学体育
○実習教育	大学体育
社会モデル	大学体育
授業	大学体育
授業実践	大学体育機能
授業のねらい	21世紀
○身体に関する知	21世紀
スキー指導	必修科目
○スポーツ	評価
成績評価	ファカルティ・ディベロップメント
全盲者	レポート課題

※○印は「今後の大学体育を支える概念」の一つと考えられるもの。

アンダーラインは「個別の努力目標」となり得るもの。（いずれも筆者評価）

表3. 機関誌「大学体育」第49～68巻に見られた
キーワードの種類と数 (頻度別集計)

頻度	キーワード	種類	個数
13件	中国養生法	1	13
10件	気功	1	10
6件	スノーボード	1	6
5件	テレマークスキー、からだ気づき	2	10
4件	スキー	1	4
3件	ヒュウマニクス、ネイチャースキー、 からだほぐし、推拿(トウイナ)、 ゴルフ、アルペンスキー	6	18
2件	リラクゼーション、養生法、 ボディ・ワーク、中国養生思想、 太極拳、スケート、生涯スポーツ、 呼吸法、健康づくり、からだ	10	20
1件	身体に関する知、手作りカヌー、 フライングディスク、テニス、 健康、学生参画授業、その他	46	46

シーデントップは大学体育に求められる条件として「学生が各種条件を選択できること」、「優れた指導者によって教育されること」、「一人一人へのきめ細かい配慮をすること」、「速やかに役立つ教育内容であること」、「相互依存的な学習グループを形成すること」、「学生を成人として扱う教育環境であること」を上げている。さらに、学生が満足するプログラムを提供することの重要性とそれを生むための教員自身のプロ意識の問題を取り上げている。本研究では一歩進んだ視点を見出すことが出来なかった「スポーツ」についても、ここで示された様々な点を点検し、充実することが出来れば、新しい視点を生む可能性はあるのではなから

うか(「スポーツ」の語源にまで思いを馳せれば「不易なもの」が既にはっきりと示されていると言えるのかも知れないが)。これが実現されれば、大綱化の荒波が、実は取るに足りないさざ波であったと認識する時代が訪れることもない話ではなからう。現時点では大学間で明暗を分けた感のある大綱化も、長い歴史の中では、テニスのゲームに例えて、1ゲーム取られたかせいぜい1ゲーム目デュースになった程度のことと捉える視点があっても良いのである。少なくとも「大学」において「体育」を専門とする人間であればこのことを否定する者はなからう。あとは実行するだけなのである。ここでどのように身を振るかの答えは、我々自身の身体に染みついたものや研究上知り得たさまざまな視点の中に既にあるはずである。でなければ、お互い、興味の方向性や能力の問題から、現職にすら就いていないであろう。今日に至ってもなお、ここで述べたような視点を持ち得ない教育者や研究者は、各種の生存競争が激しい現代において、大学体育をさらに充実していくという意志を自ら放棄しているのと同じようなものではなからうか。このような視点も含めて、今後思索を深め、各種提案をしていきたいと考えている。

※1 中国養生法はその重要な担い手として高齢者を視野に入れており、「健康」についても極めて強い関心を示すものと考えられるので、従来の「健康」概念をここに位置づけてみた。

※2 ここでは他のキーワードも視野に入れ、「スキーを代表するスポーツ関連」を「スポーツ」概念としてまとめた。

組織キャンプの体験はメンタルヘルスを高めるか？

九州大学大学院人間環境学研究所 西田 順 一

はじめに

今の子どもたちは実体験欠乏状態にあり、それが子どもたちに種々の悪影響を与えていることが指摘されている。このような指摘を受け、子どもたちの直接体験が必要不可欠であるという考え方をもとに、今後、体験学習や総合的学習の時間が義務教育のカリキュラムとして盛り込まれることが決まった。子どもたちが直接体験を得るための1つの方法として、野外教育が注目されている。

野外教育という概念は学際的な領域に位置し、多種多様な活動が含まれている。欧米では、野外教育に関する多くの研究の蓄積がなされ、野外教育の持つ心理的効果や社会的役割についての知見が報告されている。わが国においても、近年、日本野外教育学会が設立され、社会的ニーズに応えるような研究が望まれている。また、平成11年度秋期の九州地区大学体育連合研修会シンポジウム「大学体育における野外教育の可能性を探る」の中で、鹿屋体育大学の柳敏晴教授が「日本の大学における野外教育の現状」という講演を行い、大学での野外教育実施の例を挙げながら、現在の大学生にとっての野外教育の重要性について指摘した。

わが国の野外教育の研究内容をみると、組織キャンプに関する研究が最も多く、組織キャンプの有効性が少しずつ明らかにされ始めている。中でも、組織キャンプの体験によって日常生活の不安やストレス反応などのメンタルヘルス（精神的健康）が改善されるといふ報告が増加し関心を集めている。

目 的

本研究では、メンタルヘルス（精神的健康）を改善・向上させるための1つの方法として、組織キャンプを捉えた。メンタルヘルスの内容として、これまであまり重要視されてこなかったポジティブなメンタルヘルスの側面とネガティブなメンタルヘルスの側面の両方を考慮した。したがって、組織キャンプの体験が2次元的なメンタルヘルスにどう影響するのかについて検討することを目的とした。

方 法

1. 調査対象者と手続き

小学校5年生から6年生までの児童27名に、組織キャンプ体験前、体験後、そして3ヶ月後の3回、質問紙調査を実施した。

2. 組織キャンプの概要

組織キャンプは、1999年8月2日から8日（6泊7日）の日程で実施した。テントや宿舎を利用した複合的な移動型キャンプであった。主なプログラムは、班行動による3時間の大観望トレッキング、キャンドルファイヤー、飯盒炊飯である。

3. 調査内容

メンタルヘルス（Mental Health）

メンタルヘルスの測定は、西田・橋本（1999）によって作成された児童用精神的健康パターン診断検査（Mental Health Pattern for Children: MHPC.2）を用いた。MHPC.2は児童の生活場面におけるメンタルヘルスをやる気（Positive Side）次元とストレス反応（Negative Side）次元の両次元の組み合わせから「はつらつ型」「だらだら型」「ふうふう型」「へとへと型」にパターン化し、生活内容を診断する尺度である。やる気次元では、「自信」「生活の満足感」「目標・挑戦」、ストレス反応次元では、「怒り感情」「疲労」「引きこもり」の6下位尺度30項目から構成されている。MHPC.2は、高い妥当性と信頼性がすでに確認されている。

結 果

1. メンタルヘルス得点の変化

1 要因分散分析を行って得点の変化を調べた結果、「やる気」次元では有意な変化が認められた。さらに、下位検定の結果、体験前に比べ体験後と体験3ヶ月後に得点の有意な増加がみられた。また、「ストレス反応」次元でも有意な変化を示し、下位検定の結果、体験前に比べ体験後に得点の減少がみられた。

組織キャンプ体験前後および3ヶ月後のメンタルヘルスの因子得点別の変化を検討した。因子別にみると、やる気次元では「生活の満足感」「目標・挑戦」に有

意な変化がみられた。「生活の満足感」は、体験前に比べ体験後および体験3ヶ月後に増加を示し、「目標・挑戦」は、体験前に比べ体験後に増加した。ストレス反応次元では、「怒り感情」「疲労」「引きこもり」のすべての因子に有意な変化が認められ、体験前に比べ体験後に減少した。

2. メンタルヘルスパターンの変化

組織キャンプ体験前後および3ヶ月後のメンタルヘルスパターンに占める割合を χ^2 分析により検討した。体験前後間では、メンタルヘルスパターンに5%水準の有意性が認められた。「だらだら型」「ふうふう型」は、体験後にいずれも大きく減少した。体験前と体験3ヶ月後間では、パターンの割合に有意な違いは認められなかったが、10%水準の有意傾向がみられた。体験前の「だらだら型」は29.6%、「ふうふう型」は、14.8%であったのに対し、それぞれ、体験後に7.4%、3.7%に減少した。体験前の「はつらつ(いきいき)型」に占める割合が55.6%であったのに対し、体験後では88.9%に顕著な増加を示した。

考 察

組織キャンプ体験によるメンタルヘルスの変化を体験前、体験後、体験3ヶ月後の3回を比較した。メンタルヘルスのネガティブな側面であるストレス反応は、これまでの先行研究と同様に、組織キャンプ体験後に顕著な低下がみられた。ポジティブな側面のやる気では、「自信」においては有意な向上はみられなかったが、「生活の満足感」「目標・挑戦」は向上がみら

れた。これらのことから、組織キャンプの体験はネガティブなメンタルヘルスを改善するだけでなく、ポジティブなメンタルヘルスを向上させる機能を持つことが明らかにされた。

また、3ヶ月後の時点では、わずかに「生活の満足感」だけが組織キャンプ体験前に比べ高かった。しかしこの結果が、キャンプ体験がもたらした真の効果であるかどうかは、本研究では明らかにすることができなかった。キャンプ体験後の3ヶ月間には、多くのライフイベントやデイリーハズルズが考えられ、それらの影響も存在するからである。今後は、効果に影響するバイアスを省いて、真の効果について検討しなければならない。

おわりに

今回の組織キャンプのメンタルヘルスへの効果についての本報告は、児童を対象としたものであった。組織キャンプ体験は児童において、メンタルヘルスを高めるための効果的な方法であった。この知見を大学生に直接的に当てはめて考えるのは、時期尚早であろう。しかしながら、最近の大学生の悪化しているメンタルヘルスの状態を考慮すると、同様の効果を期待できるのではないだろうか。実施にかかる費用や参加者のニーズの問題があることは否めないが、義務教育においてカリキュラムとして取り入れたことと同様に、大学体育でも組織キャンプなどの野外教育が果たす役割を真剣に考えなければならない時期に差し掛かっているのではなかろうか。

健康科学講義へのディベート式授業の試み

九州工業大学 磯貝浩久

1. はじめに

「発掘！あるある大辞典」や「ためしてガッテン」などの健康関連問題を取り扱った TV 番組は、大学の講義よりも面白いという学生の声を時々耳にする。このことは、大学体育の授業に関する検討が、主として実技授業について行われ、講義授業に関してはあまり行われてこなかったことと関係しているように思われる。健康科学などの体育関連の講義においては、教育内容、教育方法、評価方法を吟味して、授業を充実させていくことが当然のことながら重要である。本稿では特に、どのように教えるかという事柄に関して、ディベート方式の授業の可能性と、それを取り入れた授業実践について報告したい。

2. 「与える知識」と「育てる知識」

知識の伝達方式は「与える知識」と「育てる知識」に大別できる。

「与える知識」は、教育の基本は人類がこれまでに獲得してきた様々な文化的遺産をより効果的に学習者に与えていくことであり、その知識の与え方が教育方法となると考える。すなわち、知識の伝達はその基本的構成要素である。ここの内容として、(1) 有意味受容学習、(2) プログラム学習等が含まれる。

一方、「育てる知識」においては、学習者の知的好奇心をくすぐり、みずからが生活世界の中から新たな知識を発見していくことを援助していくことを教育と捉える。ここでの内容として、(1) 発見学習、(2) 仮説実験授業、(3) ディベート式授業等があげられる。健康科学など生活の中での実践を意図した教育においては、「育てる知識」のウエイトが高いように思われる。

3. ディベート式授業の特徴と意義

ディベート式授業の特徴と意義として次の3点を指摘できる。1) 学生の現在に応える集団的な活動(学習者が納得する文化的実践によって教育を改善できる)。2) 知識を生かし理論を創造する活動(知識伝達型授業では知識はテスト以外にほとんど利用できないが、ディベートは知識を生活の中で活用していける

可能性が高い)。3) オープンエンドの学習(ディベートには正しい答えが存在しない。ディベート式授業によってどんな社会認識が生まれるかは、学生の個性によって多様である。その意味でオープンエンドの学習となる。)

4. 授業実践の概要

前述のような問題意識とディベートに関する知見を基に、ディベート式授業を試みた。授業は、半期2単位の選択科目の健康科学演習である。ディベートの主なテーマは、「喫煙」、「ダイエット」、「飲酒」、「社会福祉制度」などである。受講者は、必ずどれかのテーマを選択し、肯定・否定のいずれかの立場から事前にレポートを作成し、授業当日に発表・討論を行うこととした。教師は、問題提示、資料作成の補助、司会、評価とまとめ等を行った。発表者以外の受講者は、発表の概要、意見及び疑問点、全体のコメントを記述することとした。

5. 授業に対する評価とまとめ

授業後の学生の意見・感想として次のようなものがみられていた。「賛成反対の意見が聞けるので、自分なりの意見を考えることができた」、「積極的に授業に取り組めた」、「様々な健康問題について考えさせられた」などであり、肯定的な評価が多かったようである。

教師側の感想・反省としては、まず、テーマ選択やグループ編成を自由に行えることもあり、学生の積極的な取り組みがみられたことがあげられる。期待以上に発表の準備は良かったように思われる。また、発表やディベートの上手な学生と下手な学生の差があったり、テーマによりディベートの盛り上がる授業とそうでない授業があったりした。この辺は今後の課題とせらう。教師の負担に関して、ディベート発表までの事前指導が大変な反面、授業当日は話すことが少なくてもよいということもあり、多少気が楽であった。授業全体としては、体系的な知識を与えることが難しいと感じられたが、「育てる知識」を援助していくことは多少なりともできたように思われた。

最後に、現在健康に関する情報は、いたるところで入手することができるようになってきた。このような時代において、健康について何をどう教育していくかは、昔とは異なってきていると考えられる。ディベート式授業という本報告は、よりよい講義を行うための

ささやかな一つの試みである。おそらく良い講義とは、学習者が「面白く、ためになった」と感じられるような講義であろう。このような講義を目指して、今後も様々な工夫を行っていきたいと考えている。